道を変えられた主イエス

ヨハネ福音書4:1-6
【新改訳2017】

4:1 パリサイ人たちは、イエスがヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けている、と伝え聞いた。それを知るとイエスは、
4:2 ――バプテスマを授けていたのはイエスご自身ではなく、弟子たちであったのだが――
4:3 ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた。
4:4 しかし、サマリアを通って行かなければならなかった。
4:5 それでイエスは、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近い、スカルというサマリアの町に来られた。
4:6 そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅の疲れから、その井戸の傍(かたわ)らに、ただ座っておられた。時はおよそ第六の時であった。

【祈りながら考えよう】

（１）水のバプテスマは、キリスト教信仰の中心的要素ですか。

（２）普段は通らないサマリアの道を、なぜ通って行かなければならなかったのですか。

（３）「旅の疲れから、その井戸の傍らに、ただ座っておられた」とは、イエスの何を表していますか。

【解　説】

（１）身の危険を避ける(1, 3節)

《パリサイ人たちは、イエスがヨハネよりも多くの弟子を作ってバプテスマを授けている、と伝え聞いた。
それを知るとイエスは、…ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた》(1,3節)

パリサイ人たちは、神殿から両替人や商売人たちを追い出し、主イエスの弟子たちがバプテスマのヨハネの弟子たちよりも多くなり、勢力を持つようになると、パリサイ人たちは内心、恐れを感じるようになってきた。

すでにバプテスマのヨハネは領主のヘロデ・アンティパスに捕らえられ、パリサイ人たちとしてはいくらか安心していたようであるが、ここに別の勢力が台頭してきたことを知って、身構え始めた。そのことを主が知ると、主は無用なトラブルを避けて、ユダヤからガリラヤ地方へと向かわれた。

主は「**ユダヤを去って、再びガリラヤへ向かわれた**」この行動は、主イエスに対するパリサイ人のたくらみを（ほごにする）ためであったと思われる。もしもユダヤにとどまっていたとしたら、定めの時より前に襲われ、殺害されてしまったかもしれない。

主がこの時、ユダヤを去ってガリラヤへ向かわれたのは、パリサイ人たちを恐れたためではない。主が十二使徒を伝道に遣わされた時に、弟子たちに与えられた注意の中で、主がここで取られた行動の理由を知ることができる。

「**一つの町で人々があなたがたを迫害するなら、別の町へ逃げなさい**」（マタイ10:23)。無用の摩擦を避けるためである。主は、ご自分の時が来るのに先立って、わざわざ危険な所へ行こうとはされなかった。わざわざ危険な所へ行くことは、信仰の勇気であるよりは、神を試みる行為であることを覚えなければならない。危険を避けるのに必要な手立てを講じるのは卑怯なことではない。

（２）バプテスマはキリスト教信仰の中心的な要素ではない

2節の挿入句「**バプテスマを授けていたのはイエスご自身ではなく、弟子たちであったのだが**」という文章から教えられることは、バプテスマはキリスト教信仰の中心的な要素ではないということを教えている。

イエスが誰かにバプテスマを授けたというような記事は、ただの１つもない。しかも、このところではっきりと、それは副次的な働きであり、他の者にゆだねられた働きであったと語られている。

バプテスマも主の晩餐（パン裂き）も、主が教会に制定された礼典であり、してもしなくてもよいものではない。

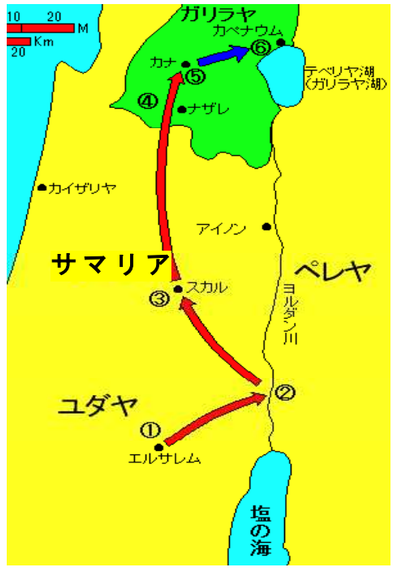
しかし、教会の第1の使命が福音を宣べ伝えることであって、バプテスマを授けることではないことは、聖書の教えているところである。

パウロも、コリント人たちに当てた手紙の中で、次のように記している。「**キリストが私を遣わされたのは、バプテスマを授けるためではなく、福音を、ことばの知恵によらずに宣べ伝えるためでした**」（Ｉコリント1:17)。

バプテスマは、イエスを神の御子キリスト（救い主）と信じた者の信仰告白であり、その信仰を公に証しするものである。バプテスマを受けることによって救われるのではなく、主を信じて救われた者がその信仰告白としてバプテスマを受けるのである。

（３）道を変えられた主イエス

《しかし、サマリアを通って行かなければならなかった。
それでイエスは、ヤコブがその子ヨセフに与えた地所に近い、
スカルというサマリアの町に来られた》(4-5節)



サマリアはユダヤからガリラヤへ向かう直接の経路の途上にあった。しかし、この近道を通るユダヤ人はまれであった。その理由は、サマリア地域を侮蔑していた「**ユダヤ人はサマリア人とつきあいをしなかった**」(9節)という実情があった。

それで、ユダヤからガリラヤに行くには、わざわざヨルダン川を渡り、ペレヤを通ってヨルダン川沿いの道を取り、北方へと向かい、迂回してガリラヤへ行くことが多かった。

主イエスがいつもの道と違った所へ行かれるのは、何のためであったのか。

主イエスがここへ来られたのは、ひとりの人と会うためであった。その名もない人、しかも、人生の裏街道を歩んでいるような人と会うためであった。　イエスが「**サマリアを通って行かなければならなかった**」というのは、地理的な配慮から、やむなくそうされた、というより、主の助けが必要な困窮した魂がサマリアにいた、という事実があったからである。

（４）主イエスの人間性

《イエスは旅の疲れから、その井戸の傍(かたわ)らに、ただ座っておられた》(６節)

この表現には、主イエスの人間性がよく示されている。主イエスが私たちと同じように肉体を持っておられた。「**ことばは人となって……**」とあるように、キリストは、罪だけを例外として、他のすべての点で私たちと同じ本質をおとりになった。

私たちと同じように、幼児から青年へ、青年から一人前の大人へと成長された。私たちと同じように、空腹やのどの渇きを覚え、痛みを感じ、睡眠を必要とされた。私たちが弱さを持つように、イエスも罪でない弱さを持っておられた。その体は、すべての点で、私たちと同じように形作られていたのだった。

ここで目にする真理は、まことのキリスト者すべてに大きな慰めとなる。罪人が赦しと平安を求めていくよう命じられる対象は、神また人であるお方である。

地上におられた間、キリストはまぎれもない人間の性質を持っておられた。天に上られた折も、真の人間性を身に着けておられた。私たちには神の右に、私たちの弱さという感覚を共感し得る大祭司がおられる。なぜなら、彼自身、試みにあって苦しまれたことがあるからである。

実際の苦痛や弱さを覚えて叫ぶ時、キリストは私たちの訴えをよく理解してくださる。私たちの祈りや賛美のことばが肉体的な弱さによって弱々しくなる時、キリストはその状態をわかってくださる。私たちの体のつくりを熟知しておられる。人間であるとはどういうことなのかを、体験的に知っておられるのである。

マリアとか他の者のほうが、キリスト以上に私たちに同情し得るなどというのは、無知の罪であり、神への冒涜にほかならない。貧しい者、病気の者、苦しむ者には、全能の救い主というだけでない、最も深い同情をよせる友が、天におられるのである。

キリストのしもべは、自分が仕えているお方の内に二つの完全無欠の本性が宿っているという、この重大な真理をしっかり把握していなければならない。福音が私たちに信じるようにと迫るお方、主イエスは、疑いもなく全能の神である。すべての点で父なる神と同質であり、彼によって神のもとに来る者すべてを完全に救うことができる。

しかし同時に、同じイエスは全く確かに人間でもあられた。実際のすべての苦しみという点で人間に同情でき、人間が体をもって経験する一切のことを体験的に知っておられる。

大能と思いやりとが、私たちのために十字架で死なれたお方の内にすばらしく結合されている。キリストは神であるゆえに、私たちは臆することなく確信をもって、魂の重みを主にゆだねよう。キリストには救う力がある。主は人であるゆえに、私たちは自由に、肉が受け継ぐ様々の試練について申し上げよう。

キリストは人間の心をわかってくださる。ここに疲れた者への休息の場がある。ここに福音がある。贖い主は、神であると同時に人であり、人であると同時に神であられる。彼に信頼する者は、安心感であれ平安であれ、アダムの子としての人間が必要とする一切のものを得ることができるのである。